ISSN 2758-6847

「鹿児島の近現代」教育研究センター

近現代センター通信

第２号　2023年9月

—目　次—

新任スタッフ紹介（伴野文亮・中嶋晋平）　1
客員教授・客員研究員紹介　2
令和5年春のシンポジウム（鈴木優作）　2
鹿児島紀行（鷺山郁子）　3
令和4年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会について（西村知）　5
令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクトの紹介　6
地域シンポジウム“沖永良部の近現代”（澤田成章）　7
上町ヒストリー—町づくりプロジェクトに参加して（丹羽謙治）　8
「鹿児島の近現代」連続トークイベント（鈴木優作）　10
墓地は歴史の宝庫（友野春久）　11
忘れられていく学校の記録（林匡）　12
声を聴くということについて（日髙優介）　14
「鹿児島の戦争の記憶」を求めて（中嶋晋平）　16
鹿児島の近現代文学（2）（鈴木優作）　17
本の紹介（日髙優介）　18
寄贈資料・今後の予定・編集後記　19

新任スタッフ紹介

伴野 文亮　特任准教授

2023年4月に特任准教授として着任しました、伴野文亮と申します。専門は日本史、とりわけ19世紀以降の「日本」における〈偉人〉顕彰や俳諧といった文化史を研究しています。

「鹿児島の近現代」研究にあたっては、私は特に、ふつうの人々の歴史経験に寄り添った歴史観が重要だと考えています。その視座のもとに、私は島嶼部を含めた南九州地域に遺る古文書や書物などの文献資料のみならず、石碑や史蹟などの非文献資料も「史料」として対象化し、19世紀以降の薩摩／鹿児島が経験した歴史を総合的に詳らかにして参ります。

その研究成果は、広く国内外に発信するとともに、様々な「学びの場」の創造に活かして参ります。具体的には、教育委員会や現場の先生方と連携した小・中・高校における地域学習プログラムの創出や、各市町村における文化財課と共同した市民講座の企画などに取り組みます。

以上の実践をもとに、新しい「鹿児島の近現代」教育研究の基盤形成に全力を尽くす所存ですので、何卒ご支援賜れますようお願い申し上げます。

中嶋 晋平　特任助教

私はこれまで、主に2つのテーマに関心をもってきました。1つ目は戦前の軍隊と地域社会がどのように関わったのかについての研究です。2つ目は戦前・占領期のマス・メディアに関する研究です。

センターではこれまでの経験を活かし、①鹿児島と軍隊との関わり、②鹿児島の地域メディアについて、資料収集や研究成果の発表などを行っていきたいと考えています。

鹿児島は明治から現在に至るまで、旧日本軍、進駐軍、自衛隊など、いくつもの軍事組織と関わりを持ってきました。軍隊をめぐる社会のあり様を、鹿児島を舞台に研究していきたいと考えています。

鹿児島の地域メディアについては、戦前の地方紙や占領期の雑誌について調査・研究を進めていきます。地域メディアはその時々の地域のあり様を描き出す貴重な歴史資料ですが、まだまだその活用は進んでいません。地域メディアを手掛かりとして鹿児島の近現代を浮き彫りにしていきます。

私にとって鹿児島は魅力あふれる地域です。鹿児島で研究できることに感謝し、地域の方々とともに、地域資源の活用に全力で取り組んでいきます。

客員教授・客員研究員紹介

有馬 晋作　客員教授

鹿児島県庁に23年勤務後、宮崎公立大学人文学部に。教授、学長等を務め今年3月末退任。鹿児島大学大学院、博士（学術）。研究テーマは「戦後の地方自治」で、単著『暴走するポピュリズム』（筑摩選書）他。

銀屋（屋久）健二　客員研究員

鹿児島実業高等学校教諭。近世の大坂の都市史を中心に、最近では薩摩藩の社会構造に関わる研究を行う。共著に『シリーズ三都　大坂巻』（東京大学出版会）・『シリーズ遊郭社会Ⅰ』（吉川弘文館）。

友野 春久　客員研究員

掃苔家。旧鹿児島城下内の墓地墓碑銘にみえる薩摩・鹿児島県先人の業績・足跡の調査研究、データベース作成。西南戦争の研究。論文に「鹿児島城下絵図にみる三方限の名士」など。共編に『鹿児島城下絵図散歩』（高城書房）

永山 修一　客員研究員

ラ・サール学園、鹿児島大学・鹿児島国際大学（地理歴史科教育法）、鹿児島県立短期大学（日本の歴史）非常勤講師。博士（文学）。著書『隼人と古代日本』（同成社）、『本庄古墳群猪塚とその出土品の行方』（鉱脈社）。

林 匡　客員研究員

鹿児島県立明桜館高等学校教諭。南九州地域史、文書管理史。藩記録所、系譜と由緒、明治期に至る文書管理等を研究。共編著『島津重豪と薩摩の学問・文化』（勉誠出版）、論文「薩摩藩の藩政文書管理と筆者」（『幕藩政アーカイブズの総合的研究』思文閣出版）

吉満 庄司　客員研究員

鹿児島県立大口高等学校長。日本近代史専攻。幕末維新期の薩摩藩について、主に対外関係史を中心に研究。共編著に『明治維新と郷土の人々』（鹿児島県）、『激動の明治維新』（黎明館特別展図録）。

令和5年春のシンポジウム
「日本とイタリア――社会と文化の諸相」レポート

「鹿児島の近現代」教育研究センター　特任助教　鈴木 優作

本センターは、令和5年3月17日、学習交流プラザ2F 学習交流ホールにて令和5年春のシンポジウムを開催いたしました。タイトルは「日本とイタリア――社会と文化の諸相」で、近代から現代にかけての日本とイタリアの関係や文化交流について振り返り、考察するという趣旨です。

はじめの特別講演では、フィレンツェ大学の鷺山郁子教授が、「イタリアにおける日本文化――文学を中心に」と題して、イタリアにおける日本学の拠点や、イタリア語に訳された日本文学作品などの紹介を通じて、日本への関心とその対象の変遷と展開について論じました。

次に、本センター鈴木優作特任助教が研究報告「ミステリが架橋する日本とイタリア」で、イタリアにおける日本ミステリの受容状況について、翻訳された作品の内容紹介とともに解説しました。

続いて、本学理工学研究科の増留麻紀子助教が研究報告「日伊で活躍した建築家松井宏方の建築表現」で、イタリア建築界の巨匠グレゴッティのパートナーアーキテクトであり本学教授でもあった建築家松井宏方の建築表現について、解説しました。

最後に、トークセッション「日本とイタ

リア 近現代の社会と文化を語る」ではファシリテーターに本学法文学部の藤内哲也教授を迎え、鷺山教授、丹羽謙治センター長、鈴木特任助教をパネリストに、日本とイタリアの近代化と交流の歴史的展開や、イタリアにおけるサブカルチャーの受容を通じた日本文化への関心や、日本の女性作家の活発な翻訳状況についてなど、両国の文化交流に関するさまざまな話を聞くことができました。

当日は WEB も含めると53名の方にご参加いただきました。トークセッションでは予定時間を越えて活発な質疑応答が行われました。

鹿児島紀行

フィレンツェ大学日本語学文学　教授　鷺山 郁子

鹿児島には、学生時代に一度訪れた事があるが、イタリアの縁でナポリ通りの並木道をかすかに覚えている程度なので、今回が初めての滞在と言ってもいい。3月15日に羽田から鹿児島空港に降り立った時点で、暖気を含んだ微風にそよぐ棕櫚に、南国の気が横溢していた。

鹿児島大学建築学部の鯵坂徹先生が車で迎えて下さり、その足で先生が保存に尽力しておいでの麓集落、加世田に案内して頂いた。お話はかねがね伺っていて、写真も見ていたが、やはり現地で町の手触りのようなものに接するのは格別で、鯵坂先生の愛着なさるのももっともと感じられた。知覧も見せて下さったが、こちらは保存状態がしっかりした野外歴史博物館といった趣きで、それはそれで大変感銘を受けたのだが、加世田の方は現在生活している人達がいて、その人達が町の一部となって呼吸している感じに得難いものがある。

翌日はセンターの丹羽謙治先生、鈴木優作先生が、かごしま近代文学館と黎明館に連れて行って下さった。近代文学館では、学芸員の方の丁寧な解説付きで、鹿児島に

関わりのある作家達の展示を観たが、鹿児島を題材あるいは背景にした文学作品がこんなにあるとは、浅学にして知らなかった。黎明館の方は展示物が充実し過ぎで、全ては見られなかったが、どちらもキュレーターの人達の熱意と鹿児島への愛、また子供を含めた来館者の興味をそそる工夫など、配慮が行き届いているのに感心した。イタリアだと、数多の美術品そのものの価値に依存する傾向があり、そういった取り組みは比較的最近のものと思われる。

17日はシンポジウムが開催された。市民に開かれたイベントという事で、聴衆の方々も多様、多彩。和やかな雰囲気の中に真剣さも看取されて、議論も活発に展開し、羨ましいような気がした。というのも、イタリアでも研究成果の社会還元という事がやかましく言われるようになり、いわゆるパブリック・エンゲージメントをせっせとやらないと予算を減らされるという脅威まであるのだが、これが実はけっこう難しい。学外でやらなければいけないという制限もある。私のある若手同僚は、学科からその担当委員に任命されて、会場探しや企画の持ち込みであちこち奔走し、イベント屋になってしまったとこぼしている。「鹿児島の近現代」センターのように、研究、教育、社会発信を並行して有意に行なえる機関が、大学のきちんとしたバックアップの元に設立できれば何よりなのだが、現状では夢のような話である。

ともあれ、今回の鹿児島滞在は、色々な意味で私にとって大変楽しく、また勉強にもなった。エピソードには事欠かないのだが、一つ挙げると、かごしま近代文学館を訪問した後、昼食をとった店に、店員に苦言を呈している初老の男性がいた。どうやら、店に入ったら予約で満席と言われ、空いている席があるのに客を断るとは何事かと怒っているらしい。支払いの時もレジの店員に懇々と意見していたが、後で丹羽先生が、ああいう薩摩人を昔はよく見かけたというような事をおっしゃった。今ではモンスタークライアントというレッテルを貼られてしまうが、それなりの理屈がないわけではないし、実は薩摩気質の典型なのかと、いたく感心した次第である。そういう人が希少になったというのも何やら寂しい事だが、時代の趨勢は如何ともし難い。

ところで、薩摩といえば焼酎。これも、もちろん堪能したが、ホテルのロビーに焼酎三種試飲コーナーというのがあって、これがなんと一升瓶三本がどーんと置いてあって飲み放題なのには驚いた。さすが鹿児島。しかも、氷や水や、おつまみまで用意してある。そういえば、昔、イタリアの鮨バーで、アルコール度25の麦焼酎を飲んでいたら、隣のテーブルにいた鹿児島県人の男性に、そんなものは焼酎じゃない、飲むなと叱られた。本当の焼酎と言えるのは35度以上の芋焼酎だけだそうだ。確かに、私が大昔九州を訪れた頃の焼酎は、度数も匂いもかなり強かったと記憶している。口当たりが良くて、味も香りも柔らかめのものは、その後、人気が出たように思う。それにしても、その男性も、今や少数派の生粋の薩摩人だったのだろうか。

帰路、空港に向かう時は、フィレンツェ大学にいらした逆瀬川さんが車で送ってくれた。わざわざ景観の良い湾岸沿いを走って下さったが、初日に鯵坂先生が、桜島は見る角度によって形が変わるんですよと教えてくれた事を、あらためて実感した。鹿児島も同じく、見るアングルによって、様々な面を見せてくれるに違いない。短期間の滞在で、鹿児島の魅力の一端にしか触れられなかったが、機会を与えて下さった鹿児島大学の皆さんに心から御礼申し上げたい。

「令和４年度地域マネジメント教育研究プロジェクト報告会」について

「鹿児島の近現代」教育研究センター　副センター長　西村 知

本センターの事業は、文字資料や写真、音源などの文字以外の資料を収集し、史的アプローチにより、鹿児島の近代をより深く理解することと、現代的な課題を解決する文理融合、分野横断的な実践的教育研究プロジェクトを行うことを二本柱としています。後者については、初年度の令和4年度は、12の「地域マネジメント教育研究プロジェクト」を行いました。テーマは、文化創生、食、観光、女性、外国人などに関するものです。研究分野は、経済学、社会学、考古学、教育学と多岐にわたっています。また、対象とする地域も、奄美群島、指宿市、霧島市、鹿児島市上町地区と鹿児島県の広い地域をカバーしています。

この研究成果の報告会が、令和5年5月20日（土）に、鹿児島大学郡元キャンパス学習交流プラザ2階学習ホールで、午前9時半より正午まで行われました。まず、ポスター報告が行われ、その後、四人の研究代表者により、研究報告が行われました。

奄美大島から、奄美島唄に関するの報告を遠隔で行った梁川教授は、カセットテープなどの音源の収集、保存の重要性を強調しました。澤田准教授は、沖永良部島における自給用バナナの栽培状況に関して、マッピング結果を用いて報告しました。この調査は、法文学部の学生とともに行われたものであり、教育効果も高いと思われます。島の自給率を上げるためには、自給用バナナなどの農作物の実態を把握する必要があるということが、研究のモティベーションになっています。ポスター報告では、西村教授は、共同研究者である中谷教授、日高特任助教との共同研究に関する報告を行いました。この研究は、沖永良部島の多様な主体が近代から現代の社会経済、教育にいかなる影響を与えてきたかを明らかにするものです。西村教授は、外国人女性、中谷教授は女性、日高特任助教は医者に焦点を当てました。

今後は、各プロジェクトと収集された資料を総合的に関連させることによって、鹿児島の近代を基礎とした地域貢献型の教育研究プロジェクトを行っていくことを計画しています。地道な資料の蓄積とそれを基礎とした地域マネジメントプロジェクトは、鹿児島だけではなく、全国、全世界に誇ることのできる地域創生のモデル構築につながると思います。

本センターの特徴は、日本の近代化において大きな貢献をもたらした薩摩、鹿児島の歴史をこれまでとは違う視角から捉えることです。私個人は、経済学者であることもあり、鹿児島の産業の近代化の歴史を現代まで繋げて考察していきたいと考えています。重化学工業化、県民所得の向上という指標だけを見てしまうと、薩摩・鹿児島は、島津の集成館事業で、発展が止まっていると捉えられてしまうかもしれません。しかし、過度の公害問題をもたらさず、農業を守り、自然循環型の産業を重視してきた鹿児島の近代・現代は、身の丈のあった持続的産業発展を実現している地域として再評価することもできるのです。このセンターが収集、保管する資料、研究プロジェクトが未来型の地方の豊かさの創造に貢献することを期待しています。

令和5年度地域マネジメント教育研究プロジェクトの紹介

令和5年度も地域マネジメント教育研究プロジェクトとして13の企画を進めています。

・沖永良部島の資源および経済の持続的好循環構築に向けた文理融合型プロジェクト
　澤田成章（法文学部法経社会学科）、大塚彰（農学部）、坂井教郎（農学部）、
　日髙優介（法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）、鈴木優作（同）、
　西村知（法文学部法経社会学科）、佐藤靖明（長崎大学）

・近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究
　渡辺芳郎（法文学部人文学科）、清水香（教育学部）

・地域とアートの相互作用を発掘・検証しその可能性を探究するプロジェクト
　太田純貴（法文学部人文学科）、菅野康太（法文学部人文学科）、
　農中至（法文学部法経社会学科）、酒井佑輔（法文学部法経社会学科）、
　清水香（教育学部）

・地域課題としての水俣病を通した普遍的課題の異分野間共有と記録の継承
　中川亜紀治（理工学研究科）、農中至（法文学部法経社会学科）

・近現代における奄美島唄の伝承の研究及び歴史的録音のデジタル化
　梁川英俊（法文学部人文学科）

・地域文化資源としての本場大島紬織物産業の持続可能性に関する調査研究
　馬場武（法文学部法経社会学科）

・肝属川の水利をめぐる民俗知と川－人関係に関する調査研究
　難波美芸（グローバルセンター）、
　伴野文亮（法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）、
　寺尾萌（法文学部人文学科）、尾崎孝宏（法文学部人文学科）

・「種子島研究」の探索および電子アーカイブ化とその教育的活用
　出口英樹（高等教育研究開発センター）、
　日髙優介（法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）、
　坂井美日（共通教育センター）、森裕生（高等教育研究開発センター）、
　川端訓代（共通教育センター）、石走知子（共通教育センター）、
　伊藤奈賀子（高等教育研究開発センター）、中里陽子（高等教育研究開発センター）

・「場」の形成から始まる現代文化創出
　菅野康太（法文学部人文学科）、酒井佑輔（法文学部法経社会学科）、
　太田純貴（法文学部人文学科）、農中至（法文学部法経社会学科）

・戦前・戦中期の鹿児島における女子教育に関する研究
　佐藤宏之（教育学部）、金井静香（法文学部人文学科）

・指宿の地域資源の探究2：鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業
　石田智子（法文学部人文学科）、吉田明弘（法文学部人文学科）、
　兼城糸絵（法文学部人文学科）、馬場武（法文学部法経社会学科）

・旧城下町鹿児島「博学連携」プロジェクト
　小林善仁（法文学部人文学科）、南直子（法文学部人文学科）、永迫俊郎（教育学部）

・薩摩焼のための新しい素材の探究
　清水香（教育学部）、菅野康太（法文学部人文学科）

地域シンポジウム“沖永良部の近現代”

法文学部法経社会学科経済コース　准教授　澤田 成章

本センターは、法文学部澤田ゼミと共催で令和5年3月27日、和泊町役場結いホールにて地域シンポジウム“沖永良部の近現代”を開催いたしました。

第1部の「大学生の部」では、法文学部澤田ゼミ学生によるポスターセッションが開催されました。合計7枚のポスター（「島バナナ探検隊プロジェクトご紹介」「島バナナ探検隊@内城小学校結果報告」「島バナナを使ったビジネスモデル」「沖永良部の養豚が失われた歴史的背景」「給食センターの島内産品使用率」「公用車の効率的・効果的マネジメント」「少人数小中学校が抱える課題と今後の調査計画」）が展示され、来場者と大学生がポスターの前で真剣に議論する姿が見られました。

第2部の「研究者の部」では、4名の研究者が沖永良部研究の進捗について報告しました。まず西村知副センター長が、ニシムラ・ジョアン（人文社会科学研究科附属地域経営研究センター）、アロンドラ・スリット・ゲイル（フィリピンポリテクニック大学）、日髙優介（「鹿児島の近現代」教育研究センター）との調査結果「沖永良部における外国人労働をめぐる現状と展望」を報告しました。続いて澤田が「和泊町学校給食センターの島内産品使用の実態と構造的問題」について報告しました。日髙優介特任助教は「沖永良部出身の医師たちについて」について報告しました。鈴木優作特任助教（「鹿児島の近現代」教育研究センター）「一色次郎調査報告」では、沖永良部島出身の作家一色次郎の足跡と創作の源泉を辿る調査の成果が報告されました。

シンポジウムの様子は和泊町役場・知名町役場にも Zoom 中継されました。業務の合間に顔を出していただいた役場職員の方々も含めると、現地の来場者だけで延べ40～50名の参加がありました。シンポジウムの最後は西村副センター長からのタピオカケーキの差し入れを囲む時間が用意されるなど、リラックスしたムードの地域シンポジウムとなりました。

上町ヒストリー—町づくりプロジェクトに参加して

「鹿児島の近現代」教育研究センター　センター長　丹羽 謙治

令和5年3月18日、法文学部の金子満准教授が企画された地域シンポジウムが、上町サンクチュアリと共催で開催された。石橋記念館の背後に桜島と西田橋を望む同館の1階フロアで、春の陽ざしが降り注ぐなか、アットホームな雰囲気で行われた。

今回のシンポジウムの趣旨は、小学校の校区で成立しているコミュニティ協議会の制度が、歴史的、経済的な地域を分断したものになっていないかという問題提起から、いかにして地域の歴史的文化的資源を共有して街づくりを行っていけるのか、地域を繋ぐ方法を探るというものであった。

校区コミュニティ協議会の運営に直接かかわったことはないが、その制度ができる以前に小学校のPTA会長を務めた経験から、町内会や校区の枠を超えて広域で共通する問題について議論をしたり交流を深めたりすることが必要であると感じていた。今回、基調講演を任されたが、地域の問題をどのように扱うのかといった社会連携について専門としていないため、自分が鹿児島で行ってきた研究と「上町」地区とが多少とも関わりをもっていたことから、自身の研究にひきつけて上町の歴史とその魅力について話すことにした。

私は薩摩藩の出版研究から、木脇啓四郎という薩摩藩士の研究を行ってきたが、江戸時代中期に木脇家はそれまで城下の中心にあった屋敷を手放し、城下の南西の外れ、現在の鹿児島市唐湊に屋敷を構えた。啓四郎は唐湊温泉の発見者でもあり、唐湊地区に長く住んだかに思われるが、実は意外にも長い期間住んでいなかった。沖永良部島で生まれ、八歳で鹿児島の本家に引き取られて唐湊に住んだものの、その後は茶坊主として鹿児島城に勤務しており、城の中か周辺に居住していたものと思われる。幕末の動乱から明治初期には、地方官として甑島や揖宿などで行政を担当していたが、明治以後も博覧会事務所で東京に赴いたり、苗代川陶器会社の運営をしたりとひとつの場所に留まることはなかった。おそらく西南戦争以降は唐湊に引っ込み、輸出用の茶の製造などをしたが、その後沖縄農場試験場勤務もあり、家を空けることが多かったのである。

ペリーが浦賀に来航する前後、啓四郎は上町に住んでいた。二度にわたる江戸詰も経験し、甲冑製作の技術を習得して帰ると、末川近江邸の門前に建てられた甲冑製作所の役宅に住み、ここで武具の製作に従事したのである。その場所は、佐藤小路（旧今給黎病院の南の小路）が国道10号線とぶつかるあたりである。西洋列強の進出に備えるため、甲冑などの武具製作が上町地区で行われたこともささやかな歴史の一齣である。

さて、話は啓四郎と磯地区との関係に飛ぶ。ここは清水小学校の校区で、同校は桜島の遠泳でも知られている。啓四郎は、幕末に文字通り桜の名所として知られていた桜谷が砲台建設のために山肌が削られ土砂が露出したままになっていたのを元に戻そうと桜の植樹を思い立つ。また、明治の半ばごろ、島津家の保護が得られなくなって荒廃した磯天神（菅原神社）の拝殿の格天井の百花図を手弁当で修復した。このように四条派の画家でもあった啓四郎は景観や土地の賑わいに対して細やかな配慮を行うことができる人物であった。

上町地区は他の地域が羨むほどの自然と歴史と文化が集積する地域、住民が誇りを持てる要素が探せばいくらでも出てくる地

域である。〈史〉と〈景〉に富む地域―それを再認識していただくとともに、街づくりに応用されることを強く望む次第である。

町づくりに大学生をいかに参与させるか――。十年ほど前、尚古集成館の全面的な協力を得て、「磯プロジェクト」なる企画を三年間実施したことがある。学生に年間パスポートを配布し、仙厳園に足を運んでもらい、学生各自が研究テーマを設定して年度末に報告してもらうというものであった。毎年、1、2回は教員が学生を引率して現地やその他の史跡を探訪することも行った。このような企画を上町全体に、そして町内会やコミュニティ協議会や各種イベントへの参与にも拡大して行うことができないかということを考えてみた。

休憩をはさんで行われたパネルディスカッションでは、松田学部長と私以外の方々は地域で活躍されている方々が実践されている企画や改革について語られたが、どれも取り組みとして興味深く、大胆なPTA改革など先端的な活動について話題が展開していった。学校の伝統や雰囲気が校区によって異なるのを肌で感じながらも、地域のリーダーの存在を頼もしくまた羨ましくも思った次第である。それを象徴するのが帰りがけの一光景。パネラーを務められたPTA会長、NPOの方々が熱心にある話題で盛り上がっていた。子供たちと段ボールで甲冑をつくり、校区対抗の合戦をしたらどうだろうか、と。

学生を地域に送りこむ具体的な仕組みについてはセンターが考えていかなければならない課題である。最近は教員のみならず学生も大変多忙である。有意義な経験を積んで社会に出ることは本人にとっても意味のあることであり、地域づくり・町づくりに関心を持つ学生が地域の支えとなるであろう。「鹿児島の近現代」学生サポーターの工夫が我々の宿題となったことを記しておきたい。

「鹿児島の近現代」連続トークイベント
「＃鹿児島の女性 01」レポート

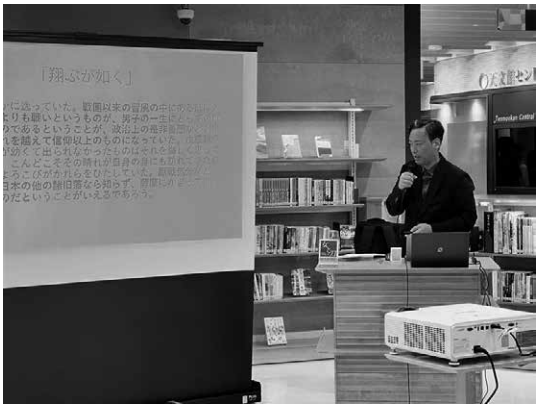
「鹿児島の近現代」教育研究センター　特任助教　鈴木 優作

本センターは、天文館図書館交流ホールにて「鹿児島の近現代」連続トークイベントの第01回を開催いたしました。

第1部は、近現代センターの鈴木優作特任助教によるトーク「女性作家を視座とした鹿児島近現代文学」がありました。鈴木特任助教は西南戦争を題材にした文学作品を例にあげ、池波正太郎や司馬遼太郎ら男性作家と阿井景子や石牟礼道子ら女性作家が鹿児島の女性をどのように描いたか対比的に解説しました。そのうえで、鹿児島をめぐる女性作家のまなざしには、社会・地域・文化における二項対立構造の階層制を可視化・相対化する可能性があるのではとの指摘をおこないました。

第2部は、鹿児島大学文芸同好会 Sora によるビブリオバトルがおこなわれました。三名の発表者がお薦めの本の紹介による対決をし、会場での投票により優勝者が選ばれました。

第3部は、法文学部澤田成章ゼミと鹿児島大学文芸同好会 Sora による「ChatGPT 対 人間」書評対決の結果発表がおこなわれました。澤田准教授は AI と人間それぞれの長所を分析した上で、AI がある程度の質で大量の文章を生産可能である一方、人間は多くの時間をかけて人を動かす文章を作れるということを論じました。



墓地は歴史の宝庫

「鹿児島の近現代」教育研究センター　客員研究員　友野 春久

私の先祖は代々鹿児島城下に住み、曽祖父は城下四番組に属し、文久3年（1863年）薩英戦争、戊辰戦争、西南戦争にも従軍しており、明治10年西南戦争から生還しました。これらの戦争の検証をしたいと考え、ここ30年間、薩摩半島を中心に墓地の墓碑銘にみえる戦争戦没者のデータを採取し、また史料調査を行い再考してきました。薩英戦争についてのデータは少ないですが、墓碑銘にみえる慶應4年（明治元年）から明治2年の18歳から30歳の被葬者の中には戊辰戦争戦没者がみえ、また明治10年代の16歳から50歳の被葬者にも多くの西南戦争戦没者がみえるので、データベースの作成を行ってきました。

鹿児島市出身の私は前記調査と共に、先祖が住んでいた旧鹿児島城下内の墓地掃苔も同時に行い、主要墓地墓碑銘データベースも作成しています。冷水町興国寺墓地をはじめ市内大型墓地には薩摩の先人が多くみえ、藩主家・家老家・家臣家・宗教者・商町人家のデータなどを採取しています。

墓地は一次史料を得るには最適の地であり、墓碑銘に刻してある人物は「公開された戸籍（除籍）謄本」であると考えています。ただ、このところ「墓じまい」する家も増えてきており墓地には空き地が多くみられます。これは各家の事情によりますので仕方のない事ですが、次第に減っていく墓情報つまり歴史情報の滅失を憂えている一人です。

忘れられていく学校の記録

―昭和期の青年学校、定時制・通信制学校関係資料について

「鹿児島の近現代」教育研究センター　客員研究員　林 匡

はじめに

昭和・平成を経た現今、県内諸学校の統廃合が進み、本来学校に残されている資料、学校関係者や地域のことを具体的に伝える情報が次第に失われていく。統合の場合も統合以前の学校への関心は次第に薄れ、記憶を呼び起こす機会も少ない。結果として関係資料は埋もれていく。しかし各地域の期待を受け密接な関わりを有していた学校関係資料には、そこに生きた人々のことを知りうる貴重なものが残されている。

筆者は以前勤務した鹿児島県立頴娃高等学校保管資料を基に、旧頴娃村立青年学校の、特に昭和10（1935）年の陸軍特別大演習の際に、県内に派遣された勅使奉迎に関わる地域の状況や太平洋戦争後の混乱期における学校存続に尽力した人々の取組を紹介した（『鹿児島史学』第67号、2021）。併せて周年事業として刊行された記念誌収録記事から、例えば長らく苦労した用水の安定確保にまつわる話や、太平洋戦争前後の勤労動員や被害状況、地域との結び付きの強さなどにも言及し、その上で学校保管文書の調査、事例報告の蓄積が必要ではないかと指摘した。

その後、筆者は縁あって県立明桜館高等学校勤務となったが、この明桜館高等学校の前身に県立鹿児島西高等学校（以後「西高」）があり、定時制夜間課程と昼間課程、通信課程を有し独自の教育活動を行っていた。明桜館高等学校保管資料から、かつて地域の青少年が就業の傍ら学んだ学校のこと、更に西高の高齢者学級活動の成果物に

ついて紹介したい。

鹿児島西高等学校の歴史と関係資料

同校の前身は昭和18（1943）年に設置された夜間中学校の県立履正中学校で、県立第一鹿児島中学校に併設された。昭和22年度の新学制実施の際に部制がとられ、以後複雑な変遷を辿る。旧履正中学校は定時制夜間課程として旧県立第一中学校から分離され、同年5月に「鹿児島県鹿児島高等学校第六部」と称し、旧県立第二高等女学校内に設置された。一方「鹿児島県鹿児島高等学校第五部」に通信教育部が併設され昭和23年6月に第五部通信教育部が発足する。昭和24年4月、鹿児島高等学校第三部・第五部・第六部が合併して鹿児島県鶴丸高等学校が発足し、定時制夜間部は昼間課程と分けられた。第五部通信教育部も鶴丸高等学校内に併置される。鶴丸高等学校夜間課程には、同25年4月に旧鹿児島市高等学校第四部普通科が合併され、当時鹿児島市内で唯一の公立夜間高等学校となる。

昭和39年4月に鶴丸高等学校が薬師町へ移転するのと同時に、加治屋町の跡地に県立鹿児島中央高等学校が置かれ、定時制夜間課程は同校舎を併用し、鶴丸高等学校から分離して県立日新高等学校として独立、なお通信教育部は鶴丸高等学校とともに移転した。昭和41年11月、鹿児島市下伊敷町で鉄筋5階建ての新校舎建設が始まり同42年6月には定時制・通信教育モデル校として文部省から最初の指定を受けた。同43年3月に新校舎が完成し移転、4月1日付けで日新高等学校と鶴丸高等学校通信教育部が統合され、定時制昼間課程が加わり西高は開校する。西高は発足当時「昼間定時制、夜間定時制、通信制の三課程を有する定通教育センターの性格をもつ全国唯一の学校」として注目された（昭和44年度西高『学校要覧』）。

昭和48年度、定時制夜間課程に衛生看護科が併置され、50年度には定時制昼間課程の農業経営科が募集停止、通信制に農業経営科が設置された。51年度に全日制商業科が併置され定時制昼間課程の普通科と商業科が募集停止となる。56年度に定時制夜間課程の商業科も募集停止、63年度に定時制昼間課程の衛生看護科が募集停止、平成2（1990）年度に定時制昼間課程の閉課程記念式典が行われ、同課程は閉課となった。相当の位置付けをもって開設された同課程の閉課は、時代の変遷とともに就学の状況変化を背景とするものである。通信制も平成12年度に閉課程となり県立開陽高等学校に移管される。定時制夜間課程普通科・衛生看護科も同年度に募集停止、14年度に閉課程とされた。最後に残った全日制商業科が高校再編整備によって平成22年に生徒募集停止、県立甲陵高等学校と統合され県立明桜館高等学校となり、平成24年3月31日をもって閉校する。

現在、明桜館高等学校保管の西高関係資料中には、昭和26年度『鶴丸高等学校夜間課程学校概要』と、昭和27年9月付け『定時制夜間課程鹿児島縣（県）鶴丸高等学校一覧』以下30年度までの『学校一覧』、31年度から35年度までの『定時制夜間課程鹿児島県鶴丸高等学校一覧』があり、昭和36年6月付け『鹿児島県立鶴丸高等学校一覧夜間課程』、37年度と38年度の各『学校要覧　鹿児島県立鶴丸高等学校夜間課程』、38年度『学校要覧抄　鹿児島県立鶴丸高等学校夜間課程』と続く。次に、昭和39年5月1日現在の『鹿児島県立日新高等学校の概況』、昭和40年度から42年度の各『学校要覧　鹿児島県立日新高等学校』がある。西高開設以後は昭和43年度以降平成23年度までの各年度『学校要覧』と平成24年3月2日付け『第34回卒業式・閉校式』パンフレットがあり、これらの中には、昭和23年度から三年間の取

組を述べる「夜間課程小史」や日新高等学校の校名由来なども記されていた。

この他注目される冊子2冊がある。一冊目は『大正三年1914　桜島大爆発の思出集』（鹿児島西高令者学級、1972）、二冊目は『明治大正学童期の思出集№2』（鹿児島西高令者学級、1974）である。寄稿された方々は、生年の判明する方で明治24（1891）年から大正3（1914）年までであり、当時既に60～80歳初めである。『大正三年1914桜島大爆発の思出集』全32編には爆発当時の場所、在籍した学校と学年や地域、爆発後の避難行動や当時の人々の状況などが具体的に記載されている。爆発当時、鹿児島市内や周辺（旧伊敷村など）での経験談が多いが、他に旧日置郡阿多村や川辺郡東加世田村、揖宿郡瀬々串、姶良郡溝辺町や福山町、曽於郡志布志町その他県外でのことも記されている。また『明治大正学童期の思出集№2』は12名による、鹿児島市など明治後期・大正期から昭和にかけての生活環境や風習、男尊女卑、女子教育や学校・寄宿舎の生活、軍隊・軍人、引揚げの経験など多彩な内容が記録されており、これらも機会を得て再録・紹介できればと考えている。

結びに

薩摩藩研究の大家であった原口虎雄氏は、「私をはぐくみ、淳々と藩政の昔を教えてくれた」古老について、「藩政末期から明治初年にかけて生活してきた古老たちは、気がつくと、もはや一人もおられない。このままでは私とともに藩政期の〝書かれざる記録〟は湮滅するかもしれないと、いまさらに責任の重さを感じる。」としたためられた（「薩藩史事始～妄語抄（一）」（『月報3　旧記雑録後編1付録』鹿児島県維新史料編さん所、1981）。原口氏は「古老たちからの聞書の豊富さ、貴重さ」の重要性と後世への継承を訴えられていたが、これは今や明治・大正・昭和初期の〝書かれざる記録〟にも当てはまる。学校保管資料（学校日誌、学校沿革史、要覧など）とともに、周年事業により編纂された記念誌、又は学校の教育活動を通してまとめられた諸記録にも、その時代と地域を窺い知ることができる歴史的事象や生活に関わる資料が残されている。現在、県内市町における調査等の取組も一部進められているが、学校の統廃合、広域化が進む中で、各地域に立脚し存在した学校保管資料も歴史資料として重要であり、その保存活用は今後の課題と考えられる。

「声を聴くということについて」

「鹿児島の近現代」教育研究センター　特任助教　日髙 優介

「私もう、本当に怖かったんです」

2018年の秋、奄美大島の宇検村で50年前の住民運動についての聞き取り調査をおこなった。「枝手久闘争」と呼ばれるこの住民運動は、村がある焼内湾の半分を埋立て、大規模な石油基地を誘致するという計画をめぐる対立だ。この計画は、村内を賛否に二分しただけでなく、集落内も、そして家族内においても立場を分けた。冒頭の語りは石油基地誘致の賛成派に立った女性の声である。彼女の「怖い」は、人口減少に伴う村の将来についての恐れであり、そして連日抗議活動を続ける反対派に対するものであった。

「己の不幸や悲しみ、失敗を自ら語りたがる人は少ない。けれど何かのきっかけで一気に言葉が溢れ出すことがあった。誰かに、何かを話したい。聞いても

らいたい。そんな思いは多くの人の心底に眠っている」――――清水潔『鉄路の果てに』（2020）

私が訪ね、調査の意図を伝えたとき、彼女は強い声で「聞いて下さい」と言った。彼女が私のために椅子を引いた光景が印象深く記憶に残っている。この50年間彼女たち賛成派の声を聴く人はいなかった。「テレビも新聞も私たちの本当のことを伝えてくれなかった」と彼女は続けた。「公害」が社会問題として大きく取り上げられた当時、公害の原因となりうる石油基地を誘致しようとしていた賛成派の人々に「金に目がくらんだ愚か者」というレッテルを貼られたことを想像することは難くない。乳飲み子を抱えていた彼女は、将来子が村を出て行くことを恐れたこと、そして、反対派の街宣のスピーカーに眠る子が泣き声をあげる事態を恐れたことを語った。

時が流れた。住民運動は沈静化し、企業も進出を撤回した。鬼籍に入った関係者も多い。村内の対立も私が調査した頃には解消されつつある状況が確認できた。それでも、彼女のなかには強い声で「聞いて下さい」というメッセージが残されていた。

近年インタビューを基軸とした「生活史」や「ライフヒストリー」「ライフストーリー」「オーラルヒストリー」と呼ばれる、人々の語りに耳を傾ける調査手法が重要性を増している。私が専門とする社会学だけでなく、文化人類学や民俗学などの社会科学、人文科学という所謂「文系」の学問においてインタビュー調査は重要な社会調査法だ。もちろん、統計調査などの量的調査も優位性があることは認めるが、多様な現代社会においては、人々の声に耳を傾けることに社会の有り様を捉える手がかりがあると考える。

金菱清らによる東日本大震災の震災体験の聞き取りや、岸政彦らによる『東京の生活史』（2021）、『沖縄の生活史』（2023）のプロジェクトはこの流れの代表的なものであると考える。本学が位置する鹿児島県においても鹿児島国際大学の民俗学者ジェフリー・アイリッシュらによる『ライフ・トーク――学生たちと歩いて聞いた坂之上の35名』（2015）といった取り組みがある。これらの取り組みからは、当該事象や当該社会の様子が実感を持って立ち現れている。

今年、私が担当する講義「地域コミュニティ論」において、1993年の鹿児島の「8.6水害」についての聞き取りを学生と取り組んだ。死者行方不明者49名、460軒以上の家屋の全半壊の被害を出したこの豪雨災害では、江戸時代に作られた三つの石橋も流失した。

60名以上の学生が、この災害にあった50名以上の人々にインタビューをおこなった。この内容を「8・6の雨音――8・6水害についての55人のインタビュー」としてまとめた。

多くが二十歳前後の学生たちは、当然この30年前の水害を体験していない。それでも、彼／彼女たちは実に真摯に丁寧にこれに取り組み人々の語りを受け取った。親や祖父母、バイト先の同僚、仲の良いお弁当屋さん、道を歩いていた人などから話を伺い、同時にそれらの人々「自身」と人々が生きる「社会」と「時代」を理解することに繋がったと考える。

夜の仕事をしていて子どもを保育所に預けていた女性の不安。翌日新装開店するパチンコ屋が気になっていた男性。帰宅する手段を失い夜中繁華街を歩いた専門学校生。慎重に迂回しながら乗客を送り届けたバスの運転手。これらの人々の「記憶」について「記録」からは把握することができない。

同時に、これらの語りからは現代社会における課題についても読み取ることができる。「経験しないと分かんないですよね」という女性の問いかけからは、災害の伝承性についての課題を捉えることができる。「皆で力を合わせた」というエピソードからは人々の連帯について考えさせられる。また、複数の人から「ビルの地下で亡くなった知り合いの話」が語られたが、人々にとっての印象的な記憶とともに、可視化されにくい社会関係についての検討の余地が認められる。

そして、最も重要なこととして人々の語りたいという思いがそこにある。ある学生は高齢の方から「もう記憶がなくなるからこのようなインタビューで思い出すことができて、うれしい。記憶を残しておかないと」と言われた。この話をきいたとき、本文の冒頭で示した賛成派の女性の「聞いて下さい」という私自身の経験を思い出した。日々は過ぎていく。そのような日々において「記憶」もまた埋没する。清水は人々の語りについて「何かのきっかけで一気に言葉が溢れ出す」と表現した。生活史を収集するプロジェクトはこの「きっかけ」として機能すると考える。

そして、これは単にエピソードを聞いたということだけに留まらない。インタビューにおいては社会的相互作用がおこなわれている。インタビュアーである学生とインタビュイーである回答者の間のコミュニケーションの帰結がインタビューの成果である。8・6水害を経験したことがある大学教員であり社会学者である私がインタビューした場合と、8・6水害を経験したことのない若い学生がインタビューした場合では、もしかしたら異なるインタビューの成果が出てくるかもしれない。このように考えた場合、インタビューにおいて社会的相互作用がおこなわれていることが理解しやすいのではないだろうか。そのため、本プロジェクトのインタビューを通して学生と回答者の双方にそれぞれ変化を及ぼしたと考える。

そしてまた、社会的相互作用は文章と読者の間においてもおこなわれる。皆さんがこのインタビュー集を読まれた際、どのように感じたか、考えたかについて、声を聴かせていただきたい。皆さんの声もまた、この社会を捉える手がかりになると考える。

（インタビュー集は近現代センターのウェブサイトで見ることができます。また、書籍版の刊行を予定しています。）

参考文献

有末賢、2000、「生活史調査の意味論」『法學研究：法律・政治・社会』73 (5), 1–27.

石原昌家・岸政彦監修、沖縄タイムス社編、2023、『沖縄の生活史』みすず書房.

日髙優介・桑原司、2020、「石油基地誘致反対運動のネットワーク的展開：奄美大島宇検村を事例に」『経済学論集』95: 105–124.

ジェフリー・S・アイリッシュ／橋口博幸、『ライフ・トーク――学生たちと歩いて聞いた坂之上の35名』南方新社.

金菱清 編、2016、『呼び覚まされる 霊性の震災学――3・11 生と死のはざまで』新曜社.

金菱清編、2018（＝2021）、『私の夢まで、会いに来てくれた――3・11 亡き人とのそれから』朝日新聞出版.

岸政彦編、2021、『東京の生活史』筑摩書房.

清水潔、2020、『鉄路の果てに』マガジンハウス.

「鹿児島の戦争の記憶」を求めて

「鹿児島の近現代」教育研究センター　特任助教　中嶋 晋平

初めて鹿児島で生活するようになってから4か月がたった。「鹿児島の近現代」教育研究センターで仕事をする以上、専門とする近代日本の軍隊やアジア太平洋戦争と絡めた研究を始めようと、ネタ探しをしていた。

様々なキーワードでネット検索を繰り返すうち、ある記事が目に留まった。それは毎日新聞の2019年9月6日付の地方版に掲載された「進駐軍上陸を語り継ぐ会　機銃掃射、恐怖生々しく　「記憶つたえなければ」鹿屋／鹿児島」という記事だった。終戦間もない1945年9月4日、アメリカ軍が鹿児島県鹿屋市高須町の金浜海岸に上陸したという史実を語り継ぐ住民の会の活動が記載されており、そこでは終戦直前のアメリカ軍機による機銃掃射やその後のアメリカ軍上陸の様子など、終戦前後の人々の体験が記述されていた。

南日本新聞のデータベースを検索し、高須町のアメリカ軍上陸に関する記事を探した。それによると、1999年から現在まで、地元の人々によって進駐軍の上陸を語り継ぐための会合が開かれてきたという。語り継ぐ目的は、主催する有志の会の名前の通り、アメリカ軍の上陸とその後の地域のあり方を人々に伝え、「戦争を風化させない」ためだ。

戦争の記憶が風化・失われていくことに対する危機感は、戦後50年の節目を迎えた90年代ごろから歴史学の分野においても課題として浮上し、大学や歴史系の資料館・博物館などがアカデミックな活動として、関連する史料の収集・保存・公開に努めてきた。もちろんそれまでにも、戦場体験、空襲体験、原爆体験など、様々な戦争体験が書籍や新聞・雑誌記事などの文字資料として、またそれらを題材にした映画やテレビドキュメンタリーなどの映像資料も、ビデオやDNDなどの形で戦争体験を次の世代に伝える役割を果たしてきた。また2000年代以降はデジタル技術の進歩に伴い、上記史料のほか、体験者の生の声や映像が蓄積され、それらをネットを介して知ることができるようになった。

こうした流れを受けてか、近年、戦後の近代歴史学が政治史を中心に提示してきた「近代日本の戦争の歴史」が相対化される形で、名もない普通の人々の多様な戦争体験に基づいた研究、各地域の戦争・軍隊に対する主体的な関わりを明らかにする研究が増えつつある。

高須町の郷土史家が復刊した『終戦秘話昭和の陣痛―進駐軍高須金浜上陸の記録―』は、高須町にアメリカ軍が上陸する前後に書かれた個人の記録をもとにした回想録である。敗戦により情報が途絶し、アメリカ軍上陸を前に恐慌状態となった高須の町の様子、自ら目撃したアメリカ軍上陸の瞬間、アメリカ兵と地域住民との関わりなど、進駐軍と地域社会との関わりが詳細に綴られている。CiNii Booksにもヒットしない、この貴重な回想録の記述は1946年3月で終わっているが、その後もアメリカ軍と地域の人々との関わりは続いたはずである。

戦争の終わりとはいつか。その解釈は様々だが、少なくとも高須の人々にとって終戦後の進駐軍の上陸は、風化させるべきではない戦争の記憶として捉えられている。まずは鹿児島の普通の人たちの戦争体験の記録を集めよう。そう思い立ったのは4月末ごろだった。

鹿児島の近現代文学（2）

直木三十五「五代友厚――大阪物語続篇――」

「鹿児島の近現代」教育研究センター　特任助教　鈴木 優作

直木賞の由来としても知られる直木三十五は、幕末維新の動乱を後景に薩摩藩のお由良騒動を描いた「南国太平記」(1930–31)の人気で一躍流行作家となった。その意味で直木は文学者として鹿児島と浅からぬ縁があるわけだが、今回取り上げたいのは直木が翌年に執筆した、薩摩出身の実業家・五代友厚の伝記「五代友厚――大阪物語続篇――」(1932)である。

「もう、恐らくは、大阪の相当の年配の人でも、五代友厚が、誰であるかを知らぬであろう」という書き出しで始まるように、本作は半ば忘れられた土地の偉人を地元出身の直木が発掘するという体裁をとっており、大阪の産業振興に尽力した五代の知名度が当時は低かったことが窺える。のちに織田作之助『五代友厚』(1942)『大阪の指導者』(1943)をはじめ多くの作家が現代に至るまで五代の伝記を手がけるが、その先駆であったといえよう。

さて今回着目したいのは、本作が五代の伝記であるのと同時に、共産主義やプロレタリア文学が流行した1932年当時の状況を踏まえていることだ。本作は、封建制度滅亡としての明治維新を、プロレタリア（町人）とブルジョアジー（武士）というマルクス主義的な階級対立に比して捉えている。

> かくして、封建制度が亡びると共に、こゝに、ブルヂヨアジー発生の機運が動き、この武士階級より下つた者が、その昔の縁故によつて政府と結び、こゝに旧町人とは別の形式をもつて、後年の政商なるものを、発生せしめたものである。
>
> 町人階級は、大きい資本主義となる以前に、武士のこの暴力的制肘を受けて、十分に発達する事ができなかつた。（中略）町人は、この封建人と手をとらなくては、完全に、資本主義の独立が、できなかつた。こゝに、所謂、政商なるものが生じたのであつて、

そして、ブルジョアジーの発生が政商の発祥であり、政商としての五代の成立の起因となったことを分析している。生産力の発展と生産関係の移行に対応関係を見いだす唯物史観である。作中で執筆の意図を「単なる伝記のみでなく、当時のブルジョア発生史として――（中略）その伝記と共に大阪の近代資本主義の発生を書かんが為」としているように、五代を一人物として評価するだけでなく、日本の「ブルジョア発生史」の中に位置づけている。

本作は発表時の現在を振り返る。

> 世界中は、ます／＼不景気になるだらう。思想はいよいよ危険になるだらう。（中略）経済は、金は資本は、何うなるか？／かういふ時代に新しい五代友厚が、出て来なくてはならない。

本作は、1930年に昭和恐慌を迎え経済危機の渦中にあった日本において、幕末・明治という激動の時代に産業界を牽引した五代の業績を振り返り、当時の経済思想と結びつけることによって、時代に奮起を促したテクストといえよう。

令和の時代に生きる私たちは、五代から何を学ぶことができるだろうか。

寄贈資料

『三州談義』21–50, 59–70号、三州談義社（2023年6月8日　北村由加子様より）
独立守備歩兵第11大隊・関東憲兵隊所属（鹿児島出身）　元陸軍憲兵所蔵写真（アルバム・記念写真帖）（2023年7月5日　久保眞介様より）

今後の予定

本センターは7月より、「鹿児島の近現代」トークイベントを開催しています。2023年度のテーマ「＃鹿児島の女性」では、引き続き以下のラインナップを予定しています。
第2回「経済学×女性×外国人」（予定）
第3回「人類学×女性×島」（予定）
第4回「教育学×女性×キャリア」（予定）
第5回「歴史学×女性×丹下梅子」（予定）
日程や会場、テーマについての詳細はセンターのウェブサイトでご案内します。
また、10月には五代友厚をテーマとしたシンポジウム、12月には奄美群島日本復帰70周年を記念した沖永良部での地域シンポジウム、3月には奄美の島唄をテーマにしたシンポジウムの開催を予定しています。

編集後記

4月に2名の特任教員と、計6名の客員教員・研究員が着任しました。これでセンターの体制が整い、本格的な始動となります。今号にはさっそく皆様の紹介や論考を掲載することができ、本誌も一層厚みを増すことができました。（鈴木）

近現代センター通信　第2号

2023年9月30日

発行　鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
〒890－0065
鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21－30
電話　099－285－7532
メール　kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp
https://kadai-kingendai.jp/

藩校造士館創立250周年・鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター設立１周年記念シンポジウム
「五代友厚と〈鹿児島の近現代〉」

【日時】2023年10月29日（日）13時30分～16時45分（開場：12時30分）
【場所】かごしま県民交流センター大ホール（＊オンラインによる同時配信も行います）
【定員】250名（オンラインは300名）
【参加費】無料
【企画概要】

本シンポジウムでは、鹿児島の近現代史における五代友厚の位置づけについて考える。

これまでの鹿児島の近現代史において五代は、他の旧薩摩藩士に比べ決して十分に語られてきたとは言い難い。しかしながら五代は、旧鹿篭金山（枕崎市）をはじめ、県内に複数の鉱山を所有するなど、鹿児島の「近代」化に少なからぬ影響を及ぼしていたと考えられる。また、現在も県内各地に五代ゆかりの史跡が整備され、各種のイベントも催されているように、現代の鹿児島においても五代という存在は大きなものがあり、近年特にその傾向は顕著である。

以上の状況に鑑み、本シンポジウムでは多彩なゲストをお招きして、日本の「近代」化と近現代の鹿児島における五代友厚の存在意義を問い直す機会を提供する。

「鹿児島の近現代」教育研究センター HP
シンポジウム告知記事 QR コード

「五代友厚と〈鹿児島の近現代〉」シンポジウム
申し込みフォーム QR コード

四六版ソフトカバー　非売品
デザインは制作中のものです
書籍版今秋公刊予定
電子版近現代センターサイトで公開中

一九九三年八月六日の記憶

８・６の雨音

日髙優介 編
「地域コミュニティ論」受講生

８・６水害についての55人のインタビュー

「もうほんの少しのことで、命が、危なかった」/「バスに乗ってたら、帰れなかったかもね」/「出るのが遅れてたら」/「自分で考えなさいよっちゅうこと」/「変な予感」/「今だからこうやって話せるけど……」/「道路で鯉が飛び跳ねた！」/「土砂を乗り上げて帰った記憶」/「見てる前で橋がね、半分ドーンと落ちたんですよ」/「水が溢れてるところをバスが通る」/「水がわんさかと押し寄せて」/「１メートル先も見えない」/「くるぶしまで靴は完全に浸かっていて」/「天災は、恐ろしい」/「もうどうすることもできない」/「自然には勝てないなと思う」/「経験しないと分かんないですよね」/「列車が宙ぶらりんになっていた」/「未曾有の災害」/「大きなトラックが流れてきた！」/「どうなるのかな」/「車がもう水にかなり浸かっている状態」/「近くにいる人たちでみんなで手をつないで」/「木造の３階建てを提案したの」/「水はあっという間」/「子供たちが遊びに行ったまま連絡がつかない」/「ＪＲに乗ってて亡くなった」/「人がこうだから安全と思ってはいけない」/「雨が降っただけで断水するのっていうような意外な感じは、はい」/「自然の恐怖感」/「台風なんて甘っちょろい」/「道路が至る所泥だらけでぐちゃぐちゃ」/「道路がとにかく使えない」/「すごい怖い」/「冷蔵庫も天井までプカプカ」/「関心を持ってもらうことが、大事じゃないかな」/「高校一年生の時の経験」/「道路脇から水がどんどん落ちてきて」/「橋も流された」/「家にいてよかった」/「線路伝いに歩いて」「家族と過ごした３０年前の８月６日」/「高いところに逃げる」/「二次災害になったらいけない」/「８・６災害からの復旧に向けて」/「自然の力は凄い……」/「行政はなかなか来なくて」/「台所に鯉」/「家に帰ることができない」/「怖かったよね、考えたら」